

25 日 獣 発 第 154 号

平成 25 年 8 月 30 日

地方獣医師会会長 各位

公益社団法人 日本獣医師会

会 長 藏 内 勇 夫

(公印及び契印の押印は省略)

第 25 回日本動物児童文学賞の審査結果について

第 25 回日本動物児童文学賞につきましては、本賞の審査会において
厳正なる審査の結果、多数の応募の中から別紙のとおり入賞作品を決定
したのでお知らせします。

本件内容の問合せ先

日本獣医師会事業担当 長野

TEL 03-3475-1695

第 25 回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「超救助犬リープ」

石黒 久人(大阪府)

<受賞理由>

救助犬リープと犬訓練士”担当”さんとの深い愛情が表現された心温まる物語。人と犬との信頼関係に加え、リープの視線で展開される物語も軽快で読みやすい。災害現場の描写も迫力がある。犬の性格によって、警察犬、救助犬、盲導犬、聴導犬等、役割の違う使役犬が存在すること、特に災害救助という危険と隣り合わせの中で活躍する救助犬について理解を深める作品である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「フクシマのねこ」

本田 真貴(福島県)

<受賞理由>

東日本大震災を題材にしたリアリティのある作品。飼い主の少女まなと猫アイとの出会い、被災、放浪、再会まで、短いながらも丁寧に描写しており、読む人の心を打つ。特に、死んだと諦めていた猫アイと再会できると知り、涙する際、目には強さと光がよみがえり、生きる希望が生まれてくる描写はリアルであり、無事に再会できる喜びと幸せが文面から伝わってくる。

「ぼくとクウの不思議な7日間」

坂本 亜紀子(埼玉県)

<受賞理由>

母が入院している7日間、犬のクウが人間の言葉を話すことができ、少年いおりと気持ちに通じる面白い構成の物語。クウに勇気をもらい、様々な事に挑戦する主人公いおりの行動が読者に元気を与えてくれる。家族愛の深さ、家族の一員としてのクウの存在感がうまく表現されている。構成、展開、叙述、ともにすぐれている。親子関係の会話がすばらしく、ほのぼのとした、あたたかな作品で、心がなごむ。

【日本動物児童文学奨励賞】

「いつか見る川」

水野 春彦（千葉県）

＜受賞理由＞

それぞれの祖父や父の影響により、少年少女が夏休みの自由研究としてメダカ等の自然の生態系を壊さず維持していくやりとりが軽妙な会話で表現されている作品。外来生物について、身近な川を舞台として、身近な動物であるメダカを題材に話が展開され、自らの問題として環境、生態系、生物多様性保全の問題を考える機会を与えてくれる。

「命をありがとう」

木乃 あい（兵庫県）

＜受賞理由＞

猫のハンティングの事実を知り、自らの肉食について葛藤する主人公梨花。自然からの恵みを「いただく」ことなく生きていけないことを自らの体験を通して学んでいく姿が描かれる。少女が感情を乗り越え、「命をありがとう」と理解に至る様は微笑ましい。食物連鎖、食育について考えさせられる作品。

「鈴の音が聞こえたら」

三田 真登（埼玉県）

＜受賞理由＞

秩父の山中と夜祭りを舞台に、少年光太と犬スズの束の間の交流は面白く、鈴を首につけた犬の存在も読みごたえがある。本当の飼い主との偶然の出会い、飼い主にスズを返す際の主人公の心情がうまく描かれている作品。

「地球が住みか」

藤井 弘子（広島県）

＜受賞理由＞

外猫への餌やりの問題を上手く紹介しつつ、猫嫌いなおばあちゃんと、猫好きな主人公麻緒と姉真由、両親との楽しい一家の様子が良く伝わってくる作品。ありふれた日常生活が見えるように素直に書かれ、低学年の子供達にも理解しやすいと思われる。

「ライオン日記」

田中 廣司（岐阜県）

＜受賞理由＞

学校飼育動物のウサギの飼育を通じ、命の大切さを学んでゆく児童達を描き、読み手に考えさせる作品。「小さな弱い動物を大切にできない者が、どうして友達を大切にすることができるの？学年が一つ上がると、一つ強くなれる。そして同時に一つやさしくもなれる。強くなりたいから、弱い動物にやさしくなる。」心に響く言葉である。